

第27回KCELS大会報告

鷓野ひろ子

12月6日午後、第27回神戸女学院大学英文学会を開催いたしました。英文学科では新カリキュラムにおけるグローバル・コミュニケーション(GC)・コースの2年目を迎えましたので、初めてGC分野での特別講演として、立命館大学国際平和ミュージアム館長をなさっている安齋育郎立命館大学国際関係学部教授に「日本は世界平和にどう貢献できるか」という題でお話いただきました。安齋育郎教授は東京大学工学部原子力工学科卒業の工学博士ですが、現在、自然科学概論のほか、平和学や地球環境論などの講義もなさっています。また日本平和学会理事、日本科学者会議代表幹事、原水爆禁止世界大会議長および起草委員長、日本学術会議平和問題研究連絡委員会委員など多数の重職を務められ、核兵器をなくす運動に30年も取り組んでおられます。御著書には、『核戦争と地球』、『原発と環境』、『からだの中の放射能』、『地球非核宣言』など、多数おありです。平和の定義から始まり、テロの問題など、大変重い内容にもかかわらず、時には手品も使って、判り易くお話いただき、参加者は深い感銘を受けました。

安齋先生には、超多忙なスケジュールの中、時間を割いて頂いたにもかかわらず、聴衆が少なかった事は大変申し訳ないことをいたしました。開催者として深く反省し、今後は英文学科の学生も社会情勢に目を向けるよう指導に努力していかなければと思っています。

研究発表に関しては、本学の博士課程に在学中の門口弘枝さんが「ロレンスの『意識』再考：『虹』において」という題で、また、本学卒業後、日本女子大学大学院博士課程に在学中の難波彩子さんが「会話ストラテジーとしてのテンス—日英語の談話比較から—」という題で、瑞々しい発表をなさいました。今後の活躍が大いに期待されます。

日本は世界平和にどう貢献できるか

安齋育郎

平和の現代的意味と「人生4つの大事」

平和は、戦争のような「直接的暴力」がないだけでなく、飢餓・貧困・社会的差別・不公正・人権抑圧・環境破壊・教育や衛生の遅れなどのような、人間の能力の全面開花をはばむ社会的原因としての「構造的暴力」、さらには、それらの暴力を助長する要因としての「文化的暴力」のない状態をさすものと理解されている。

私は、常々、学生諸君に「人生、4つの大事」を語っている。すなわち、①生きることによっていかなる価値を実現するのかを自分なりに発見する、②自然や社会に豊かに働きかけ、価値実現のために努力する主体性をもつ、③自然や社会のしくみについての合理的・体系的な科学的知識を修得する、④自分と異なる価値観をもっているという理由で他人の人権を損なわない、の4つだ。人生の幸せとは、自分なりの価値を発見でき、持てる能力を全面開花させて価値実現のために生き生きと取り組んでいる状態、すなわち、自己実現の状態だと心得ている。その意味において、平和は、自己実現を妨げる社会的要因のない状態と考えることもできる。



最近気がかりな平和を取り巻く状況

昨年「9・11テロ事件」の1カ月後、私はモンタナ大学マンスフィールド・センターに招かれ、「過去と誠実に向き合うー和解と共生」と題する講演を行った。空港は武装兵が警備し、ホテルのフロントには大きな星条旗が掲出され、駐車場の車という車にも国旗が貼られていた。その後、アメリカの自由と民主主義の危うさを感じるニュースが伝えられた。女子高生がTシャツに「戦争反対」と書いていたら退学せざるを得なくなった。イスラム風の服装で歩いていた婦人は「警察官に取り囲まれた時に抵抗した行為が警察官に脅威を与えた」という理由で禁固半年、保護観察2年の有罪判決を受けた。アシュクロフト司法長官の「あの事件以来自由が損なわれたと主張する輩は、テロリストの味方だ」というコメントも伝えられた。湾岸戦争時には、ラムゼイ・クラーク元司法長官がブッシュ大統領のイラク攻撃を批判し『ジョージ・ブッシュは有罪だ』という本を書く自由があった。知人のデイヴィッド・エアハート博士は、「アメリカの民主主義の現状は、1931年(満州事変)と1937年(盧溝橋事件)の間の日本の民主主義の状態で似ている」と書いてきた。ブッシュ政権の好戦的政策の背景には、軍需産業との結び付きが非常に強いという事情があるだろう。

しかし、希望もある。バーバラ・リー議員はただ独りアフガン報復戦争に反対票を投じたが、彼女の行為は、ジャネット・ランキンの流れを汲むものだろう。ランキンは米国最初の婦人議員で、婦人の政治的権利や労働条件の改善に努力したが、第1次・第2次両大戦に反対票を投じた唯一の連邦議会議員として知られている。

アメリカでの講演で私は“Forgive, but not forget”という思想に言及したが、「許せる」ためには2つの条件が必要だろう。すなわち、①過去と誠実に向き合う、②2度と戦争をしないという誓約、の2つである。日本の場合、歴史教科書問題や平和博物館に対する右翼的攻撃の実態などからして、①の実績は成熟しているとは言えない。また、国際的な軍事貢献志向や改憲の潮流を見るにつけ、②の条件も満たされているとは言い難い。

国際平和への日本の貢献

私は、日本の安全保障および国際平和への貢献について、次のように考えている。

第1に、憲法の平和主義の精神との関係が取り

沙汰されている自衛隊は「国境警備隊」と「災害救助隊」に解体・再編成する。国境警備隊は海上保安庁機能と海上自衛隊を統合して編成する。災害救助隊は国土交通省機能をも組み込んで編成される。

第2に、国際貢献は徹底的に非軍事分野で展開されるべきものとする。国連の決定によるPKO(平和維持活動)には非軍事からの逸脱を抑制して参加する。また、世界のどの国、どの地域でどのような平和的貢献が可能かを見極めるため大規模な「国立国際地域研究所」を設立し、力量豊かな研究を展開する。その成果を踏まえて国際貢献を実行する人材を養成するため、「国立国際貢献大学」を設立する。そこでは、単に言語だけでなく、歴史・文化・宗教・政治・経済など、国際貢献に必要なとされる知識や技術が総合的に教えられる。

第3に、自衛隊の再編によって浮く資金を活用して、世界各国との対等・平等・互惠の平和的国際関係づくりを旺盛に進め、「有事に備える」という思想から「無事を創る」思想への政策転換を図る。

そして、第4に、核軍事同盟としての日米安全保障条約は「日米平和友好協力条約」に変換し、日米間の平和的な友好と協力を一層発展させる。

ロレンスの「意識」再考：『虹』において

門 口 弘 枝

ヨハネ福音書の冒頭節「初めに言があった」について批判するD.H. ロレンスは、言ではなく出産する女性の肉体にこそ神が宿ると主張する。ゆえに、彼が肉体感覚の再評価を試みたと論じる批評が多い。T.R. Wrightは、アウグスティヌスの見解によって、性的特質が人間の弱点だと解釈されている一方で、創世記において性が悪とはみなされていない事実を指摘し、ロレンスは肉欲感覚の再評価を試みることによって創世記を忠実に解釈したと論じる。しかしながら、アダムとイヴの楽園からの追放は、彼らが性を意識するようになった所以であるというロレンスの主張から、肉体のみではなく肉体感覚をも含む精神について再考察する必要が生じる。本発表では、原罪を人間の意識の始まりという肯定的な点からとらえ、人間が神から

与えられた意識についてロレンスの『虹』において考察した。

『虹』の冒頭に現れる女性たちは、生殖の神秘に魅了される男性たちの傍らで、意識を持つ一人の人間として尊重されることのない生活に抑圧を感じている。この男女の対比は、創造主に従うことが最善だと主張したアダムと、自己の欲求に忠実であろうとしたイヴという人類の祖の間で生じた対立を継承している。神の命に背いたイヴの末裔であるブラングウェン家の女性たちは、罪の代償として与えられ、受け継がれてきた人間の意識を守り続けようとするが、実体を伴わない意識は、それを共有する人間が意識するよりほかに守るべきではない。三代目のアーシュラは、顕微鏡に映る生物が自己を取り巻く宇宙と触れ合いながら存在する様子から、他者との交わりにおいてこそ自己のあることを理解し、恋人スクレベンスキーとの間に意識の交わりを求める。彼は自己の意識を国家に委ね、彼女の求めに応じることなく小説は結末を迎えるが、創世記においての神と地上の生き物との契約を連想させる虹が現れ、意識においての人類の交わりが男女の間からその子孫へと永久に受け継がれていくものとなることを暗示している。

会話ストラテジーとしてのテンス

— 日英語の談話比較から —

難波彩子

英語の会話ナラティブにおけるテンスの交替は頻繁に起こり、語り手が過去のイベントをより印象的に語る際、重要な機能を果たしている (Wolfson 1982) と言われるが、日本語におけるテンス交替は同じことがあてはまるのかどうかはまだ明らかにされていない。

本研究では、日英語の会話ナラティブにおけるテンス交替がどのように表されているのかを明らかにし、両言語でのテンス交替のメカニズムを探ることを目的とする。本研究は、(1)ストーリー内で表されるテンスの絶対数、(2)歴史的現在を含めた、語られる場面 (Foreground/Background) とテンスとの関わりが、テンス交替が起こるかどうかの指標となると捉え、これらについて量的・質的分析を試みる。データは日英語の日常会話を扱い、

英語はサンタバーバラコーパスから、日本語はそれに相当するシーンの会話を録音し、記述したもののから、それぞれ100分を分析する。

分析結果として、以下の点が明らかにされた。英語では、語り手はイベントを聞き手に語る上で、テンスの使用を重要視し、過去のイベントを振り返る際、本来は過去形を用いるところを非過去形によって表示する傾向にある。更に、語り手は、こうした非過去形と過去形との交替を現すことによってナラティブをより効果的に語っていることがわかった。一方、日本語では、語り手はイベントを聞き手に語る上で、テンスの使用に英語程依存しない傾向にある。従って、英語程、上記のような非過去の使用は多くない。代わりに、テンスではなく、非定型節 (Non-finite Clause) の「て」節や「と」節の使用によって、語り手はイベントを聞き手により印象的に伝えていることがわかった。日本語における「て」節、「と」節の使用は、いわば英語のテンス交替に匹敵するストラテジーとして考えられる。

キャンパスニュース

<退任>

吉本多栄子専任講師

<2003年4月より就任>

長尾ひろみ助教授 新任

津田ヨランダ・アルファロ助教授 新任

身分変更

風呂本惇子氏 奈良女子大学定年退官

2002年4月より城西国際大学に赴任。

本城 智子氏 2002年3月末に神戸女子大学を定年退官。

今泉志奈子氏 2002年4月より愛媛大学法文学部人文学科専任講師に着任。

訃報

本学名誉教授 Frances B. Bogard先生が2003年1月19日 (現地時間) ご逝去されました。享年94歳。天上の平安をお祈り申し上げます。

元本学科教授三宅晶子先生が、2002年9月17日ご逝去されました。享年72歳。天上の平安をお祈り申し上げます。

国際学会発表

- * **平井雅子氏**
英国グラスミアで開催されたWordsworth Conference (2002年7月28日～8月10日)にて研究発表。
- * **今泉志奈子氏**
シンガポールで開催されたAssociation Internationale de Linguistique Appliquée 2002, 13th World Congress of Applied Linguistics (2002年12月16～21日)にて研究発表。
- * **Kerstan Cohen氏・山田由美子氏**
アメリカ、ハワイで開催されたHawaii International Conference on Arts and Humanities (2003年1月12～15日)にて共同研究発表。
- * **栗栖和孝氏**
明海大学にて開催されたLinguistics and Phonetics 2002のシンポジウム Development of OT as a Linguistic Theory (2002年9月2～5日)にて講師として研究発表。
同Linguistics and Phonetics 2002の一般セッションにて研究発表。
- * **Paul Maeker氏**
アメリカ、オレゴン州ポートランドで開催された Society for Intercultural Education Training and Research (SIETAR) (2002年11月)にて研究発表。
- * **立石浩一氏**
明海大学にて開催されたLinguistics and Phonetics 2002のシンポジウム Development of OT as a Linguistic Theory (2002年9月2～5日)にて講師として研究発表。
- * **山田由美子氏**
イギリス、Stratford-upon-Avonで開催された30th International Shakespeare Conference (2002年8月18～23日)にて研究発表。
- * **吉田純子氏**
神戸女学院大学にて開催された日韓美学研究会・東方美学会 (2002年9月)にて研究発表。

記念賞

2002年度、以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

- 大沢幸恵記念賞** E00070 村上亜弥
- デフォレスト記念賞** E00001 秋山亘子

会員による出版紹介

- ◇ **朝日千尺氏** 「ルースの愛＝エロスとアガペー」山脇百合子監修『ギヤスケル文学に見る愛の諸相』北星堂書店 (2002年3月刊) (共著)
「殺人と売春エリザベス・ギヤスケル『メアリ・バートン』」西条隆雄編『ヴィクトリア小説と犯罪』音羽書房鶴見書店 (2002年5月刊) (共著)
「イギリス性－ギヤスケルとフォースターを繋ぐもの」朝日千尺編『ギヤスケル小説の旅』鳳書房 (2002年9月刊) (共著)
「“The Immediate Present” (即時性) と “ハイク・モメント”『鳥とけものと花』と俳句－」飯田武郎編『D. H. ロレンス－詩と自然』松柏社 (2003年1月刊)
- ◇ **馬場美奈子氏** 『日米映像文学に見る家族』金星堂 (2002年3月刊) (濱野成生他編、共著)
- ◇ **別府恵子氏** 『英語圏文学：国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』人文書房 (2002年4月刊) (竹村悦子他編、共著)
『英語文化フォーラム：異文化を読む』音羽書房鶴見書店 (2002年9月刊)
- ◇ **平井雅子氏** 『崇高の美学と文学』神戸女学院大学英文学美学研究グループ (2002年3月刊) (編著)
- ◇ **石川有香氏** 『ウィズダム英和辞典』三省堂書店 (2002年12月刊) (共同執筆)
- ◇ **田中敬子氏** 『フォークナーの前期作品研究－身体と言語』開文社出版 (2002年10月刊)
- ◇ **鶴野ひろ子氏** *Emily Dickinson's Marble Disc : A Poetics of Renunciation and Science.* Tokyo : Eihosha. (2002年12月刊)
- ◇ **吉田純子氏** 『人間理解のコモンセンス』培風館 (2002年4月刊) (共著)
『ねむり姫がめざめるとき－フェミニズム理論で児童文学を読む』(R・S・トライツ著) 阿咩社 (2002年7月刊) (共同監修)
Bridges for the Young : The Fiction of Katherine Paterson. Rowman & Littlefield. (2003年3月刊) (共著)

神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年4月1日施行)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

編集後記

英文学科でグローバルコミュニケーションのコースが始まり、今回初めて、この分野での基調講演を持つ機会に恵まれました。今後とも広い分野での活動と交流を目指していきたいと考えております。このNewsletterの作成にあたり、多くの方々のご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

KCELS Newsletter 編集委員

(2002年度運営委員)

◇栗栖和孝 ◇C. Seton ◇鷗野ひろ子 (ABC順)

KCELS Newsletter No. 18

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/kceIs.html>

2003年3月発行